

国際漁業学会 (JIFRS) 短信

<http://www.jifrs.info/>

事務局 E-mail: jifrs.kaiyodai@gmail.com

郵便振替番号：00100-6-26448 国際漁業学会

2021 年度第 2 号

2021 年 12 月 28 日刊

目次

- | | |
|-------------------------------------|---------|
| 1. 理事あいさつ「ventilation」 | 若松宏樹 |
| 2. 2021 年度 JIFRS 大会（オンライン開催）参加報告(1) | 廖 凱 |
| 3. 2022 年度 JIFRS 大会（東京大会）予告 | 婁小波・宮田勉 |
| 4. 事務局便り | |

1. 理事あいさつ「ventilation」

若松宏樹（国際漁業学会理事・農林水産政策研究所）

2019 年に JIFRS 理事を拝命した若松です。専門は資源経済学です。資源経済学は漁業管理と資源量を動的に考えて最適な漁獲方策を導く学問です。博士論文が日本の水産エコラベルの消費者選好だったこともあり、私は本来の資源経済学から逸れて、消費者サイドの需要分析やマーケティング要素が強い研究に携わっています。農林水産省農林水産政策研究所に本年の 10 月から在籍しております。その前までは、水産研究・教育機構におり、旧水産総合研究センターの中央水産研究所経営経済研究所で、東日本大震災からの漁村復興のプロジェクトに関わり、岩手県や宮城や福島の間評被害の研究等を行ってきました。学位は米国のロードアイランド大学において、環境資源経済学を取得しました。あまり出来の良くない生徒で、学位取得に長い時間がかかり、その分日本の学術コミュニティの風土にあまり触れる機会がありませんでした。そのため当初日本の学術コミュニティとの風土の違いに戸惑った面も多かったです。その中で一つだけ、私が JIFRS にいる理由となるものをこれから話したいと思います。

それは、風通しの良さです。JIFRS には、小規模だからということもあるかもしれませんが、他の日本の学会にはない風通し（ventilation）の良さがあると思っています。私が日本で戸惑ったことの一つにコミュニティの閉鎖性がありました。アメリカ、といいますか、経済学分野では経済学という一本の理論を柱として、農林水産経済学を含む応用・実証経済学や実験経済学、そして理論経済学などで構成されています。アメリカで私が所属した学会は国際漁業経済貿易学会（IIFET）や北米漁業経済学会という水産経済学の学会でしたが、格上の存在として農業経済学会があり、さらにその上には米国経済学会（AEA）があります。

AEA の大会では存在さえ知らなかった分野から金融政策まで極めて多くの研究者が集まります。だいたい大きな分野の方が格上で、農林水産の分野では、よくできたら水産から農業へ、農業から経済学へと投稿先を変えます。それぞれ専門分野を超えて研究する人は日本と同様あまり多くありませんが、風通しはよく、他分野であっても研究の話すれば経済学という尺度でだいたいの内容は理解できるのです。しかし、日本にきて「水産と農業は（やり方が）違うから」ということで済まされてしまう現実を目の当たりにして戸惑いました。色々とコミュニティの知り合いに話を聞いてみると、農業も水産もほとんど交流はないし、出来がよくても上の学会（海外や日本経済学会）などにもっていくことはあまりしないということでした。しかし、上に行くほど最新の手法を使っている研究が多く、それを自分の分野に応用するというので、末端の分野であっても最新のトレンドを追い、研究能力の質を高く保ち、また分野を超えても理解が得られる状況が出来上がるのではないかと思います。そうでなければ、なかなか最新の手法などが広まらず、他では通用しない手法なども生まれ、学会全体の研究の質も落ちてしまいます。

しかし国際漁業学会にはこのような風通しの悪さがないと思うのです。国際漁業学会は IIFET と名目上つながっているということもありますが、それ以上に、水産学や資源学から来ている研究者もいれば、農業経済から来ている研究者、国際開発学の研究者、さらには行政からも来ており、多様な人材が集まっています。なにより、それらをあまり否定しない土壌が醸成されていることが、素晴らしいと思うのです。

日本で当初は色々と戸惑った事も、理解したり、慣れたり、忘れたりして馴染んできましたが、風通しの良さは未だにどの分野でもあるべきだと信じています。そして、自分のところよりも秀でていると思うのであれば、積極的に吸収して自分の分野にフィードバックすべきではないかと考えています。特に最近では機械学習の分野が急速に進歩していますが、JIFRS 学会誌ではすでに機械学習を使った研究が出ています。これも風通しの良さが結果に結びついた一例ではないかと思えます。閉鎖的なコミュニティでは進取の気性を持つ学会内の研究者が外の学術コミュニティに学習に行くことでも同様の結果になるとも思いますが（それはそれで素晴らしいことだと思いますが）、水産に興味のある他分野の研究者を引き込むことで、個人の資質によらずより大きな波及効果を持つのではないかと考えています。

コロナ禍の中、懇親会も減り、コミュニティの交流という面では難易度が上がってきていますが、逆に遠方の専門家など、普段接する機会がなかった方々とビデオ会議などでより身近に接する機会も増えました。これを好機と捉えて柔軟に適応し、学会の持続的な発展につながる必要があるかと思えます。当方も理事就任という機会をいただきましたので、本学会発展の一助となれるように努めて参ります。よろしく願いいたします。

2. 2021 年度 JIFRS 大会（オンライン開催）参加報告

リュウ カイ
廖 凱（東京海洋大学大学院博士後期課程）

2021 年度国際漁業学会は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、9 月 4 日から 9

月 5 日までオンラインでの開催となりました。大会では、4 日の午後にシンポジウム、夜にオンライン懇親会が行われました。また、個別報告は 5 日の 10 時から実施されました。私自身は、個別報告では発表の機会を頂き、先生方から貴重なコメントがいただけましたことに対して、心より感謝しております。また、短信で参加記を書き記す機会を頂き、改めて感謝申し上げます。

今年度のシンポジウムでは、東海大学の李銀姫先生と漁村総研の浪川珠乃上級研究員をコーディネーターとして、「日本の小規模漁業の持続可能性とその実現」というテーマで行われました。妻小波会長（東京海洋大学教授）からのご挨拶の後、報告に先立ちまして李銀姫先生からは小規模漁業の持続可能性と脆弱性、また日本の小規模漁業の持続性の確認や持続メカニズムや存続策などの課題について解説をいただきました。

最初の報告者として大東文化大学の山下東子先生が「持続性の視点から見る小規模漁業の特質と課題：中・大規模漁業と比較して」という演題でご報告をされました。内容は日本の小規模漁業の持続可能性の背景（生産要素の利用の視点から）、この特性を大規模漁業及び途上国の小規模漁業との比較、今後の持続性の維持を脅かす要因、問題の解決のシナリオなどについてです。「小規模漁業の持続性の維持を脅かす要因として、漁業労働者の不足と沿岸漁業資源の減少が疑われる」という問題提起に大変共感を覚えました。この問題提起に応えるためには、二つのことにチャレンジすることが必要かと思われまます。一つは、もし漁獲量、労働者数、資本投入量、漁業資源量などのデータがあれば、小規模沿岸漁船漁業の生産力の主な減少要因を特定することができます。もう一つは、漁業労働力の需要量が供給量より大きい現状においては、賃金水準を上げれば、労働者の不足を解消できることが期待されるので、漁業労働力の供給弾力性に関する分析が有効かと思われまます。

次に全国漁業共済組合連合会の井上清和様から「小規模漁業を持続可能ならしめる日本特有の制度：漁業共済レビューを中心に」という演題でご報告を頂きました。内容は漁業共済事業の発展、目的、種類、内容、方式及び仕組み、と当該事業の運営状況についてです。沿岸の小規模漁業経営の安定と漁業管理とを両立させることは決して簡単なことではありません。そのため、資源管理・漁業経営安定対策のコストベネフィット評価に関する研究は非常に重要な意義があると考えられます。

3 番目の報告として、東北大学の Alyn E. Delaney 先生から「小規模漁業の持続性とコモンズ：欧米諸国と日本の比較から」という演題でご報告されました。ここでは、EU の共通漁業政策、漁業ガバナンス、日本のコモンズと小規模漁業の持続可能性を脅かす要因について詳しく紹介されました。また、マルタの漁業政策の失敗事例を取り上げることによって、小規模漁業者がどんな影響を受けたかについても分析されました。とても有益な情報を拝聴することができまして、大変勉強になりました。

4 番目の報告として、水産研究・教育機構の三木奈都子様から「小規模漁業の持続性の根幹をなす漁業労働：その現状と対策」という演題でご報告されました。内容は 2018 年漁業センサスの調査結果に基づいて、沿岸採捕漁業の漁業労働力の状況を紹介され、青森県佐井村の事例を用いて小規模漁業の持続のための漁業労働力の現状と対策について詳細に分析されました。佐井村の「漁師縁組事業」の新規漁業就業の支援制度をはじめ聞くことができ、新規就業者を確保するための独自の工夫、あるいは社会的仕組みが地域において構築されていることに大変驚きました。当該支援制度による今後への効果が期待されます。

最後に東海大学の関いずみ先生から「持続可能な小規模漁業のための価値創造：女性や若者の起業活動からのアプローチ」という演題でご報告を頂きました。漁家や漁村の女性たちを主体とする起業活動の意義と役割、近年見られる新たな活動の展開の可能性についてわかりやすくご説明頂きました。これらの活動は、水産物の新たな需要、市場、販路等の開拓と小規模漁業の高付加価値化を進める上できわめて有効であることを確信することができました。

5つの報告のあとに東京大学の牧野光琢先生と東京海洋大学の松井隆宏先生の両先生がコメンテーターとして5名の報告者に対して貴重なコメントが行われました。両先生は5つの報告の要点を簡潔にまとめられた上で、鋭い質疑が展開されました。さらにその後のフリーディスカッションでは、それぞれの報告に対して、参加者から多くの質問が出され、熱の帯びた質疑応答がなされました。最後に大会委員長の宮田勉先生に閉会のご挨拶を頂き、シンポジウムが盛会裏に終了しました。

本学会に参加することによって、多くの新しい知見を勉強することができただけでなく、物事をより深く考察するための視点や視野を広げることができました。この場をお借りして感謝申し上げます。

最後になりますが、2021年度国際漁業学会大会の開催に最善を尽くしてくださった事務局の先生方やお手伝いの学生の皆さま、そして参加された全ての方々に改めて御礼申し上げます。

3. 2022年度JIFRS大会（東京大会）予告

婁小波大会開催校代表・宮田勉大会運営委員長

2022年度大会は東京海洋大学品川キャンパス（最寄駅：品川駅）にて行うことになりました。多くの会員、関係者の皆様からのご参加をお待ちしております。

会 場：東京海洋大学 品川キャンパス

〒108-8477 東京都港区港南4丁目5-7

日 時：2022年（令和4年）8月27日（土）～28日（日）

日 程：8月27日 午前：各種委員会・理事会

午後：シンポジウム（水産物の供給体制の構築に関するテーマを予定）

夜：懇親会

8月28日 午前：個別報告（申し込み数が多ければ午後も）

午後：総会等

参加費：一般会員 2,000円

一般非会員 3,000円

漁業関係者・学生無料

4. 事務局便り

1. 2021年度 JIFRS 山本賞（国内賞）について

本年度は推薦がありませんでした。次年度は多数の推薦をお寄せくださいますようお願いいたします。

今年もお世話になりました。2022年もよろしく願いたします。